国境の島　与那国島誌

――その近代を掘る――

著者　宮良　作

国境の島　与那国島誌　――その近代を掘る――　著者　宮良　作

9784903536057
1921020021907
ISBN978-4-903536-05-7
C1020 ¥2190E
あけぼの出版
定価 2,300 円
（本体 2,190 円＋税 5%）

原始与那国島への上陸者は南から来た可能性が強いという私の仮説

トゥグルハマ遺跡は南方系

赤道の方からとうとうと上ってくる黒潮の道は、琉球列島、日本列島のなかでは、最初に与那国島の南海岸にぶつかります。また、同じく黒潮に洗われるあの大きい台湾島の大部分は、与那国島から見れば南に位置します。

さて、一九八三年に与那国島トゥグル浜遺跡が、沖縄県教育委員会によって発掘調査されました。その調査担当者の安里嗣淳先生が、二〇〇三年に発表した二度目の論文「与那国島トゥグル浜遺跡の編年的位置の再検討」によれば、この遺跡は、炭素年代測定で四〇〇〇年前のもので、あの有名な下田原遺跡とほぼ同年代のころのものだということです。そのトゥグル浜遺跡の埋蔵物のなかのシャコガイを利用した貝斧、石斧はフィリッピンからインドネシアにかけた遺跡から出土しているものとよく似ているが、北琉球以北には同様のものはないということです。この遺跡は、与那国島空港滑走路の下に埋まってしまい、残念ながら、現地保存ができていません。

黄智恵教授の指摘

台湾中央研究院に、黄智恵教授がいます。彼女は、与那国島について長期間調査し、何度も与那国島にきて、島人たちと語り合い、友人も多くいます。彼女が一四七七年、朝鮮漁民の与那国島への漂流記録『成宗実録』（以下『実録』と呼ぶ）を通して、次のような台湾島の原住民族と当時の与那国島住民の似通った点や共通点を感ずると指摘しています。非常に興味深い説です。そのうちいくつかを紹介します。

＊『実録』をよむと〝違和感〟がなく、台湾東部原住民族をみる思いがする。

＊『実録』と同じく、南部のルカイ族は、稲の収穫の前に大声をたてないし、静かにする。

＊与那国島のティダンドゥグル伝説と台湾島東のカラバン族原住民の伝説は、よく似ている。ヤドカリを放して、人が住めるかどうかを試している。

＊細長い布で、子どもを背中でなく、前に抱く〝おぶり方〟は、南部の平埔族と共通している。

＊大きな櫛（比川部落後間家の）は波照間島にもあるが、カバラン族と共通している。メラネシア（ニューギニア北）では、交易に櫛を使っていた。

＊稲の種の貯蔵の方法、植え方、刈り入れ方が、コウショ島のヤミ族、タオ族の栽培史に似ている。彼らは、バターンからやってきた民族だ。

＊タマハティのとき、勾玉でなく、ビーズ玉を首に何回も巻くが、ビューマ族は、ガラス玉にたいして信仰がある。また、ガバラン族は、治療に玉を使う。

＊『実録』にある与那国島住民の髪の結い方も、台湾島原住民と似ている。一九〇二年、鳥居竜蔵の記録でも同じだ。

＊ハイドゥナンとは、台湾島ではないかと思われるふしが、台湾島の漂流関係の資料から伺える。

もちろん、以上は『成宗実録』当時の与那国島人のことであり、現代人のことではありませんが、注目されるテーマだと思っています。

わたしの「南方説仮説」

さて次は、私自身の経験や若干の意見ですが、冒頭に書いたものにもふれます。

＊与那国島住民の一部と台湾原住民の顔形に、似たものを強く感じます。たとえば、男性の目は深くするどく感じますが、女性の目は大きく、美人系で魅力的です。形質人類学の研究結果を知りたいぐらい。私を育ててくれた（実母は五